里見八犬傳

拾八編 四十九

へ13
709
101

門 遠 13
號 709
卷 101

明治三六年十月九日購求

南總里見八犬傳第九輯巻之四十九

東都　曲亭主人編次

第百七十九回下　題目は前に出さう東西和睦して
両國津を開くとのふ局末是なり

再説巨田助友齋藤高實下河邊行包原胤仁直江荘司兼光水崎蟹人
等は犬阪犬塚犬村犬川等の諸犬士を案内せて在與て乾淨処なる坐席を造
るゐ成氏憲房朝良朝宣自胤等の諸敗將は既に其告あるをもて皆うち聚て
あゐ居り。管衛の武士二三十名其戸口をぞ守りける。當下助友高實行
包等の六個の使者は諸犬士を相引まて各其主を拜謁を。面正しくもるき
所行なれば只恙なきを祝しつ且和議のなりしを告も近き日を迎の士卒をまゐらせ
べしなどのよのこ況諸敗將は孰も一人も恥ざるべき。心ゐを果敢々さくぬを。憲

奉公の忠孝重亂久執合あて。里見の慈善と犬江が神藥の效驗を告るとき。是ぶ諜言ふ似くれば助友ハ好も聞くぞ。躍て身の暇を告て行包高實等と俱ふ皆客の間ふ退けば犬阪下野犬塚信濃。是を送りて異日を契るふ助友等ハ對面の狡ひを演て辭し去まく為る程ふ外面ふ咳して突と内ふ入る者あり。是則別人なりぞ犬山道節帶刀先生忠與と犬塚犬阪の間ふ坐して。佐と助友ふ向ひてのたまふ既ふ面善ふていへども。折るけるべいまぞ御意を沿ぞ。和談成りていへべ約束の日ふ至りて城地返しまゐらせんの勿論之遽莫千住竹塚ふ遠くハ穂北の莊ハ落鮎餘之七有種の乾父る。氷垣殘三夏行が自沿閑發の新田ふて今ハ有種が所沿之然を有種ハ根角谷中ニが談言ふて一旦没落あれども扇谷殿敗北の折有種悄地ふ便宜を沿て忍岡の城を拔き旦穂北の莊を捕復して一時ふ恥を雪ぐ。然ぞ東西和睦の上ハ有種ふ説諭して忍岡の城ハ形の如く返しまゐらせんず。異

議あるべくもあいぞ。但穂北の莊と其前後左右なる四ケ村ハ皆有種ふ隨從せり。有徳れば件の五ケ村ハ有種が自沿ふて。返しまゐらせべ莊園ふあらぞ。那有種ハいまぞ當家ふ仕へざるとも。其岳父夏行と俱ふ原是豊嶋の殘黨なるべ我忠與と空ハ谷是音の憶ふ紀ふあらぞ。這義什麼と論ぜれば助友听ぐ點頭て其義ふ沿ハぬ豫より聞く那有種ハ人の許せる武勇の義士。其所沿の莊園を今更誰ふ掠奪せん。其義寡君定正ふ聞え上て子子孫孫ふ至るまで除地ふなんの勿論之這義ハ心安るべしと拵言ふが如く答ふる折ふ犬江親兵衛も出て來て這席ふ入りしかば。羇ふて我ハ先旅館ふ退りて歸帆の准備をまべけるとて直江水崎も共侶ふ告別ふ身を起せば大塚信濃遽しく立て遥ふ送りける。當下犬江親兵衛ハ助友ふ向ひてのたまふ。言新しくいへども。御家の忠臣河鯉守如の獨子

なる。河鯉佐太郎孝嗣は靈狐の冥助にて讒死の刃を免れしより政木大全と名を改めて今は當家の家臣たり其冤枉の罪なるよしは扇谷の兩公子に孝嗣みづから愬え上て那冤を鮮られば後にこそ听るべけれ這義を忘れ給ひねかし。と告れば助友嗟嘆して。現に河鯉親子の如きは忠臣孝子なるに讒者の為に害はれて親は死し子は免れて今より隣國の股肱に做れるは悔て及ばぬことながら這折をもて對面して後の交を結ぶべく欲を這誼を饒しぬるぞや。といふに親兵衛欽びて悄と重紙戸をうち鳴せば外面に立在たる政木大全孝嗣は方三四寸なる梧桐の小箱を三方托にうち載て开を携へ内に入りて先其小箱を大阪の身邊にやをら閣程に親兵衛則孝嗣を先助友に引合すれば。迭の口宣他事もなく和睦の欽びを演にける其言訖て大阪下野は件の三方托を曳よせて却助友に告るやう御曹司は扇谷殿和睦の誓言にとて竹箭を折て贈り

なりしを寡君既に拜受せり是によりて義成も亦這一種をもて贈り物とす。正に是東西唇歯の交を結びて相背ざらん照据なり這義宜く賢侯へ申え上させ給ひねと演て件の三方托に載たる小箱を遞與まゐらせ助友は謹を兼て先其小箱を熟覧るに蓋に十二の文字ありて豆有一頁長杉無木吉義箴封とありしかば助友眉をうち顰めて左さま右さま思ひ惟るに豆一頁ある者は是頭の字也又長杉に木なくして吉と長なる吉の三字は是を合すれば其字是髻也頭と連續做す時は則是頭髻也然ば這箱の内なるは去歳の十二月八日の夜艾我君矢口の河邊にて敵の伏兵を免れ難て那隊の頭人小水門目にと合せられし御頭髻を今返させ給ふなめりと夙く悟りて且恥てうち戴きつゝ其箱を懐に挿と夾て却扇智に答るやう仁君誓言の御貺。御意の趣承りぬ立歸りて寡君に渡さば歡びはいへん城受取に定めらまする。二十

一日ゐの程もゆくべき身の暇をゆるしてんと詞急しく別を告て旅館を拔て立て
ゆくを大阪下野政木大全留もゆくべき共侶ゐ玄関までぞ送りける。徳而巨田
薪六郎助友へいたぞ旅館へ還と躰て高實行包冨介等の五個の使者ゐ
商量ゐ果て且秋篠廣當熊谷直親ゐ彼の趣を懇々と告知せて
歸帆の免を乞ふこと五個の使者と共侶ゐ當晩洲崎の港口より各快船ゐ
うち乘て其投方へぞ走らせける。伴當孰も多くぞ船さへ舵さへ備ひて亟の所
用ゐ充ーしぞ這事後ゐ変えける。然べ其次の日ゐ大阪下野大山道節大村大
学ゐ義成主ゐ見參して城遞與ーの事を命ぜられ且堀内貞澄小森高宗登
桐良二等ゐ其ゐ旨を傳へよとぞ照書一通を渡ーゐ三大士等ゐ兼りて。
退りて躰て伴の士卒をいそぐー立て水路より新井五十子忍岡の城を拔て還り
ける。左右する程ゐ四月二十日ゐ山内の家老齋藤高實并ゐ兵頭

絶内外助惟定等ゐ士卒一千許を將て鎌倉ゐ入り來て其主山内顕定ゐ館を
受合ゐ入ーまくも又其隊の頭人建柴浦伏弘望ゐ士卒一二百名を將て船ゐて
憲房ゐ迎ゐ入ーまくり。ゐの時堀内雜魚太郎貞澄ゐ大阪下野ゐ傳達せらるぞ。
其下知を乞ふーゐ隨即齋藤高實ゐ鎌倉ゐ館を遞與ーゐ敢秋毫も犯を
ざる隊ゐ兵三千餘名を將て先新井まで退くゐ士卒都礼讓ゐ貌ゐ毫も乱
雜ある事なべ齋藤高實ゐ山内ゐ士卒咸敬服ーと及び難ーと思ひけり。
介程ゐ新井ゐ大村大学ゐ既ゐ城遞與ーゐ准備ゐ田税戸賀九郎逸時ゐ
屋八郎景能等と商量ーと降人田良亀九郎等をもて三浦義同ゐ宅眷ゐ和
議ゐ成ーよーを告て且城兵ゐ降參ーすると三浦四十八郷ゐ士民ゐ相從へると召聚
合て則宣示やう。若們時ゐ勢を見て苟且我ゐ從ふと雖ども今ゐ東西和議成て
當城も亦故ゐ如く三浦殿ゐ返ーまゐらるべ若們も故ゐ如く亦是城主ゐ民

たるべ。各々這意をゐよゐと言叮寧に説諭へ大家安らく嘆息して合難うる所が中に甲良亀九郎找を出て其義心ゐれべども三浦親子へ暴雄と當城に還り來べ我們が敵に降りしを憎みて必殺やせん願ふは安房へ倶しなれと請へば又三浦四十八郷の御士豪民村長們も異口同様に願ふやうに已そへ御威勢に怕れて従まりしに安房の館の御仁政を慕ひまつる故なれべいざこの儘幾年でも御領の民たらまく欲き這義を饒させのみうと勸解るを大学安めぎ介ゐを我吒るゐわれど堅返と其地を返さぎと且其民を奪ゐべ和睦の名ありて和睦の實ゐし我何ぞ然ゐる変詐をせんや甲良生も這義を思ひれ一旦我に降りしそも三浦殿親子へ先度に懲まて若们を罪をべくるぎと心許ゐく思ひゐべ我又在是せん術ゐり必怕べらぎと諭つ一紙の告文に降人甲良亀九郎并に三浦の民と毎の罪ゐ免よりを書寫て城の垂関に貼しける有徒し程に堀内貞澄へ鎌倉より退き來て則大村大学に鎌倉のまの

趣を徒々と告しゐべ大学則其隊の士卒と三浦四十八郷の士民に身の暇を取らせて各其地に返し遣るに皆悉々として去るに忍びぎ猶云々と請ふ者ありしを大学饒さぎと且のやうに若们知ぎや鄙語云幹木に勝る朴枝なし今新恩を耳ぐ舊地を去らべ後悔めらん然とも所依ゐる者ゐべ異日稲村へまゐるべし今番に倶ぐして皆悉出し遣りけり有徒し程に水崎蛮人小磯真砂に残兵三四百人を將て沼田の城より這里に来て大学并に貞澄逸時景能等に和睦の歡びを演ずるとき當下大学に戰粟銭財武具調度に至るまで皆等帳に寫し目録に合して是を蛮人真砂等に遞與まに明白にして犯し掠る者ゐし且のやうに甲良亀九郎等城兵の苟且我に從ひしに城内に三浦殿の宅眷と士卒の妻子等のれべん徒れば他们に不忠の罪ゐし我其義を寫して玄関に貼し置きに義同義武ゐ來まさべ各這意を傳へよゐしと言詳に教諭すべ蛮人真砂等欽び羨て敢遁に

者ゐるけり。然べきの日。城内の掃除ゐるも。届ざる所ゐく。傲慢不礼の事ゐるを。礼儀の礼儀しる。其名虚しらざれば。姫実人真砂従兵すでいよ〳〵〳〵敬服し。別を惜む意あり。恁而犬村大学は。堀内貞澄田税逸時。古屋景能等と。俱ゐ安房より従ひ来る。隊兵僅ゐ三百餘名を。将て新井の城を辭し去りて。水路安房へ還らまくまる。程ゐ三浦四十八郷る。村長荘客等。猶別を惜む者あり。其毎數百名。沙を蹕揚て。走り来る。大学ゐ乗る船の纜を。曳止て。相公ゐ。そ我们を。棄て安房へ還りゐ。願ふは這地ゐ在城し。猶善政を施ゐ。凍餓死亡の憂ひなく。楽しく妻孥を養ふべ。いそ〳〵と。諸聲ゐ叫びて。放べくも。わゝれ大学是を慰とそ。諭せども。只貫縁る。貞澄も亦逸時景能も。禁ゐ難く。大刀引抜きて。纜弗と。斫捨ゐ。順風ゐ任まる。船ユ毎ゐ。本船伴船十餘艘。艘。柏子齊しく。漕ゐて去る。招ひる村長荘客。沙ゐ。涙ゐ。掬りて。

喚聲のみぞ。浦風ゐ。吹送られて。遠離り行。船ゐ。幽ゐ聞えける。然べきの後里見実堯又。里見義弘の時ゐ至りて。找て鎌倉ゐ乱入り。一日ゐ三浦四十八郷を。殺捕りて。久〳〵里見の所領ゐ。做まゐ。這時既ゐ那地の民の。德を慕へる。餘波ゐ。義成主を。礼儀の。植し。善根るべ。と。時の識者ゐ。論じける。ゐる。是後の話。小程ゐ。犬阪下野胤智ゐ。五十子の城ゐ。久り來て。城遞與の事遺もゐく。新井大塚及石濱ゐ。三人城へ。義成主の下知を。傳へて。且浦安牛助千代丸。圖書助等と。俱ゐ。各士卒を部ゐて。件の准備を。做き程ゐ。二十一日ゐ。做りしゐ。這朝犬阪胤智ゐ。去歳の冬。ゐ當城ゐ。囚置しる。大石憲儀と。綱坂四郎等を。牽出させて。告るゐ。和議の成りたるを。ゐて。且ゐ。我當城ゐ。和殿等を。久〳〵。屏居ゐ。せ。ゐ。河堀殿と。貌姑姫ゐ。ゐ。在る故ゐ。て。和殿等と共。倡ゐ。這城郭を。領守る。胤智ゐ。用心る。ゐる。ゐ東西和睦成りて。今日ゐ當所と。大塚忍岡の城まで。も。皆是扇谷殿ゐ。

返しまゐらるれば。和殿等這里に在ども好。在らば面目あるべし。まの敵に放免を去向へ各隨意せよ。おを亂智が寸志なりと。大刀兵具と始憲儀綱阪等が。乘さる馬さへ牽出させ。皆是を給らせしかば。憲儀と綱阪四郎等に恥て其歎びをゆめゆめ。阿容々々として退きて且城兵に送られて五十子の城を出しかば。投て往方を定らぬ。左にも右にも面伏られば館定正の迎にまゐらんと。河鯉の城へいそぐ程に其路一里有餘にして大塚の城の兵頭なりける反橋雜記丁田畔四郎等が。大塚の城を受合んとて。殘兵僅に二三百名を領て。河鯉の城より來ぬるに逢ひけり。憲儀是に勢凭きて。然ば先我城を受合て。明日河鯉の城へ參んそ。其里より路を引復せば。綱阪四郎も已とをりぬ。憲儀に相俱して大塚の城へいそだけり。然べ又去歳の冬より。五十子の城に在りける妙真音音曳が單節い河堀殿と貌姑姫を守護の爲に附られて。那十個の女房等と俱に最正首に

仕ふる程に。東西和睦整ひて既に城遁與の日に做りしかば。這朝亂智へ河堀殿に見參して。和睦の事仔々と城遁與のよさを告まゐらせ。且妙真音音曳が單節へ亂智に智なに先ぐちて。彼方へ安房へ返さんとて。心ばさまの遽しく。亦外面退出しかば。妙真音音曳が單節へ辭去まく欲する程に。河堀殿も貌姑姫も他等が日屬正首に仕へけり。好意を感て。別を惜みなん事大らかなるべし。金銀をもて鏤らるる匣玳瑁の櫛釵児をもを自許に取出て。餞別にそ與へなを。妙真音音曳が單節へ推辭て敢て一箇も受ず。奴四人に數ならぬ原に賤婦人を伴れども。里見殿の御恩に大江親兵衛仁義大母姥雪代四郎與保が渾家よ。媳婦よと人に知られて。東西遠しくに伝らぬに是賜りて何にせん。畏うに伝れども。是に這儘措せなと異口同樣に辭にの。敢受ず意なければ。河堀殿に困て果て。後方に伝る女房に恁々と吩付て。唐織の夾衣の蘭奢の熏ばもえらぬを四襲許出させて。廣益にうち載て。妙真等四箇の婦女子に

四犬女功成りて衛を両夫人と解く
ひくま
妙もん
ひとよ
かとれ

えこ治
ハ多う寿
かーりんの
ぎょくう

みづから萬ゝ宣やう。汝等の頗直なる東西受らるねば。術もなけまど時ハ今四月の下浣ゆゑ。今月い殊更温暖なるゆゑ去歳の儘なる小袖でハ。汗ゆゑ堪ぎやゆゑんぎらん。切て是を受てよと言叮寧ゆゑ論ゆゑバ妙真音曳ゑ單節ハ貴人の任ゆゑ理り迫て云々と宣まるゑ猶幾番も固辭んハさるゑ。只汎俱ゆゑ受戴きて被ぎて歸て退きて各ゝら被て出て來ハ皆席末ゆゑ居並びて其欣びを稟ゆゑ。河堀殿ハ本意なりそ。徐ゆゑ其方を見久りゆゑバ他等ハ今のゆゑゝる夾衣を下ゆゑ。今まで着る舊衣を各胡意上ゆゑ被されバ河堀殿訝りそ先其所以を問ゆゑバ。妙真音曳ゑ答て云ハく。這舊衣ハ去歳の冬。我瀧田の老侯の被けさせゆゑ。恩賜の東西で仕るゆゑ。今ゆゑゝる夾衣ハ則是時服ゑ。且綺羅やゆゑ仕まどゆゑ。這新賜を那舊恩ゆゑ思ひ易んやあるを。舊衣を。今も猶上ゆゑ被さるハ餘馨を拜ゝ。本を忘ざぬ。愚意ゆゑそ仕れと。解きてさそハとだるゆゑ。河堀殿ハ興ハ酣て又いふよりもるゝゝバ妙

真音音曳ゑ單節ハ共侶ゆゑ別を告ゑ。既ゆゑ和睦整て。今日ハ城を返さるべゝ。這故ゆゑ奴毎ハ身の暇を賜りそ。船出して安房へ還り仕らん。王椿の八千歳まで恙なく在さんを祈りまるゝ仕るのゝ。諧定正程なく還らせゆゑ。愚夏を轉ゝて御欣びハ八入ゆゑゝんと。查まるゝゝね。今ハ去も御別ゆゑ仕るゝね。とハハ果て。俱ゆゑ身を起せバ。河堀殿も貌姑姫も。禁難ゝ云々と。詞寡く。労ひるゆゑ。當下侍坐せ。女房が一両個ゆゑて。鈴鐸の間まぞ送りける。有徳一程ゆゑ。小森但一郎。高宗木曽三次季元ハ正兵一千餘名を引て。大塚の城とゝかへり來ゝ。大阪下野ゆゑ告るやゝ。鄭ゆゑ大石憲重の兵頭。反橋雜記丁田畔四郎と。喚。做を者。殘兵二三百名を引て。城を受合んそ來ゆゑけゝ。開が頭人ハ豫ゝ。放免せゝるべゝを。使えゝる。大石源左衛門憲儀。綱阪四郎相從へゝ。這故ゆゑ。咱ゝ。敢。饒さぞ。窘ゆゑ。且道く。源左殿ハ。當城主大石氏の嫡子ゆゑ。去歳ゝ久く擒ゆゑ。せゝ。刑餘放免の罪人。綱阪四郎も是ゆゑ同ド

文庫室藏

這城郭に源左殿に返さまほしくば扇谷殿に返しまゐらまるるべし。何ぞ刑餘の人に遞與さん。和殿両個は且退きね。扇谷殿より遣さまさる。友橋丁田に城を遞與て。咱等退りて後にこそ出入い和殿等の隨意なるを勿論なるべけれ。目今は容ぐしこそ城門より内に饒さねい憲儀大く腹を立て。好々其義ならば我い館の御迎に河鯉へこそゆくべけれと咲きて友橋雑記が將て來る人馬を幾許か分させ。伴當に乗る馬に跨りて綱阪四郎と共侶に開が儘出てゆくべ咱等は李元と相共に雑記畔四郎に城を遞與て且従來の隊の兵をのゝ。倶してかへり來ると告まゐ又木曽三次季元も其足らざるを補ふて。那里の光景を報る折から妙真音音曳る單郎は後堂より倶に退き來てゆくべの趣を犬阪に告知まれば亂智は今咲て小森生の計なる。妙真音音刀自等の寡慾なるも皆是忠義の真面目にて最愉快といひつべし。城遞與の時分も近づきぬ。先雑兵をもて浦安牛助友勝を召よせて且のやう。今日城遞與の事果て我們稲村へ退る折。這四個の婦女子を同船せゝと云々。後に人の議論やうん。和殿は是始より這男婦烈女等を倶に大功成べし。今より同船して稲村へ送りゐれ。然ば援岡猿八と雑兵二三十名を従せん。あらゆるいそぎせゝ友勝は異義なく高宗季元妙真音音曳る單郎に和睦の歌びを演ぐして退りて准備を做す程に亂智は又猿八等に其事を吩咐る。船は夏く柴浦に維ぎそめり。然ば音音等四個の婦女子は犬阪以下の頭人に別れを告げ身装して友勝猿八等と倶に伴の雑兵を將て城を出。柴浦より船に乗る時に音音は舵工を召よせ。咱は大茂林に所要あり。那里へ船を寄よ。舵工等は則あらゆる漕出して程なく。船を那浦に歌べ音音は一個の雑兵を召よせ海岩七夫婦を召よせていふやう。汝等は咱を相忘れいせで。去歳の十二月八日の夕ぞ咱は浦に流寓して命終らんとせし折に汝等の介抱にて身は恙なく思ひの隨に。

敵を謀りて功成りて。這人々と共侶に目今安房へ還る。咱は則里見殿の家臣なる。
姥雪代四郎が老婆音音是と又這同船三個の婦人は犬江親兵衛主の大母
妙真刀自并に秩二個の媳婦曳は單節と嘆做を者ぞ。汝等耳の底に藏て
後の話柄のせよ。然ども今も旅なれば汝等に報ひに做をべ。東西なる。先是を取まる
ぞとて。鄭に河堀殿の賜りうる唐織の夾衣を曳る單節が品まぞも三龍袋に出て
與まべ。妙真も又其衣を那賞禄にそ合はせけり。然ばそあれ海苔七夫婦は憶い
ざりける那老女の這光景に胆を潰して呆るゝ半晌許夫婦両人に件の衣を受けり
捧げて夢うとむりに満面都てうち笑れて。其秋びをいまくまるを音音は急に推禁
めて咱等は去向をいそぐ。暇ある日に稲村の城内へ尋來よとべ〳〵との間に又漕出を順
風の船を禁ぶも難うる海苔七夫妻共侶に建柴の立盡きまで見送りけり。海苔七夫
婦のる。這下に話る。有徒一程に巨田新六郎助友と小幡木工頭東良の獨子なる。

小幡木工太郎東震と倶に二三千の士卒を將て五十子の城に來ぬる程に人馬を多く
城外に留在せて。助友と東震は有名の老兵百名許を從へて。徐に城に入りゝ〳〵大阪
下野亂智は鞆内葉四郎を。是を迎へさせて小森高宗木曽季元千代丸
豊俊小水門堅宗等と倶に助友東震に對面を。送の口誼言託て河堀殿と貌
姑姫の恙なきを告るとき。恁而城遶與の作法あり。開は大村大学が做る一事の趣と
異なるべくもあらざるべ言肖て備はせぎ。當下大阪下野は城兵の降參せしは皆助友
返しと倶せぎ。只從來の士卒二千餘名を三隊に分て其二隊は高宗季元豊俊
堅宗を頭人とき。三隊の士卒を出し果て助友が赤城外に在せる人馬を徐に繰出
け。出る者も入る者も齊々整々として混雑せぎ。大阪が准備の船は夏く柴浦に
わたりて。皆那浦に赴けるその日又扇谷より忍岡の城受合の頭人白石城丞重勝
も。入間三三松山三十を副とき。其隊の士卒一千有餘昨夜半より河鯉の城を

文溪堂蔵

出て忍岡に投て來ふけり。是より先ふ犬山道節忠與い卯東小六明相荒川太郎一郎清英と俱ふ城遠與の准備ふ。使を穂北へ遣して落點餘之七有種ふ和睦の一義を告知せそ。他ら加勢ふ在陣さらる五百の雄兵を皆忍岡へ召よせけり。登時落點有種い家僕小才二世智次と御民一百有餘を將て忍岡の城ふ來ふけれい道節則明相清英ら共ふ共侶ふ對面して今番和議の成り一事の顛末を穂北并ふ隣里四人村い有種の所領さるべき義を往る日巨田助友ふ掟さる趣を告知せそ。和殿い咱ら共侶ふ稲村へ參りの里見殿を後盾ふせば今より後も安るべ。と諭せば有種然い在下素より其意ふ。ども東西和睦して和君ら安房へ還りの。我御黨阽そ影護くぞあらむぞん。先我宅眷ふ。安堵させく後ふそ。稲村へ參るべけれ。と推辭やば道節理ふ。合て猶も餘談ふ及程ふ白石重勝ら士卒を將て城受合ふ來ふければ道節先重勝と入間三三松山三十と伴當十名許を城ふ入れて明相清英有種と共侶ふ重勝ら對面して。當城い是ら有種ら僕ふ一壁の力をそ攻捕りて會稔誓の恥を雪や。呼べ然ども今和睦の上い返しまるふ異義ゆく但穂北五人村い有種が自ふの所領を以て這城と易まく欲。其義いぬる日巨田生ふ我談ぎる所之ところ。一欠甚麽ぞや。と問べ重勝答てのふやう。其義へ助友ら言上ふそ寡君定正の證文ふあり。とのいつ躰て一通を含出て遠與を道節い受合ふ。ら開き見て有種自ふの莊園ふて扇谷殿の賜ふふゆらねば這照書い要ふけれども忍岡の城郭と交易を。者とのふ文言を載られされば後々ふ子孫の為ら藏も措くもよろしんと心て躰て有種ふ渡せば有種ら亦閲して然而重勝ふ初對面の口誼を云々と舒ふどき既ふて受授のる果ら。道節い明相清英有種ら共ふ俱ふ忍岡の城を辭去れば扇谷の士卒入替りて白石重勝入間三三松山三十ら共ふ是を守れり。一進一退交情異

人其頑なるをもて賢とも這擧に在ても里見の徳を思はざる者なかりける。然ば這時道節が准備の船は両國河に多くあり且附從ひし兵毎は。馬淵場九郎が殘黨にて。武蔵相模なる野武士毎なれば城に留らんことを欲せず。里見の民とならまく願ひしかば。今道節が隊に在る者九千餘名と唱へたり。道節は是等を将て両國河原に赴く程に有種も御人を将て水送にとて倶に由くわり係る折から登桐山八郎良于は石濱の城を原胤久等に遞與て士卒一千許を将て這河原に退き來つ。道節等と共侶に船出せまく欲すれば聞に千葉の老黨原胤久等は昼夜に行徳口の敗軍に駭怕れて。主君并に家臣の家眷を将て河鯉へ脱れ去りしかば。其日皆衛復して欽びの聲城に満けり。然ば良于は道節等に對面して且是等のよしを告げて。准備の船に乗まく這地の艄長五十三太素なる古は扇谷の封内に居まく欲せず。東の岸へ陡らんとて倶に枕を採りて下總へゆきしかば留守なる高師等。里見の舵工を相資けて衆船を遣

まくせ准備に昇りまゐらせしかば。道節山八郎は明相清英等と共侶に各士卒を令ち乗せる其船一百許なるべし。有種は其乗果るまで郷人と共侶に河原に一霎時目送りて日暮て穂北へ還りける。話分両頭。這朝稲村の城内なる諸敗将に留別の饗饌あり。中酒の時に及びて義成義通出て慇懃の詞を盡さる。左右なる程に諸敗将を迎の船多く洲崎の浦に來にけり。第一番は憲房を迎として山内の家臣建柴浦攵弘望老兵十名雜兵二三百餘名。第二は朝良朝寧を迎乎て。萬戸月十字七宿尻城戸攵及大石憲重が兵頭菅菰三布七関口小田八等是の從に士卒二百餘名也。這四個の頭人は去歳の十二月本所の敗軍に各深痍に堪難て。一旦仆れしもなかりしが辛く命を免れて。河鯉へ來て將息して。其瘡稍瘥しを上に見えたる三三三十八入間九郎松山五六の子弟なぞありける。間話休題第三番は自胤を迎の士卒一百五六十名也。原胤久這里に居ながら胤久等は参らず。第

四番に為景を迎の頭人宇佐美三郎職政梶原后平二景澄士卒三百餘名第
五番に義同義武を迎の頭人小磯真砂士卒二百餘名第六番に稲戸由充を
迎の頭人妻有復六荻野井三郎士卒二百餘名と只成氏の迎の伴當のミヨヌ〳〵ぞ。
望見一郎科草七郎士卒五十餘名と船一艘のうち乗りて河鯉の城より來たり。許
我に路遠けねば那里の士卒いまだ來着せざるべし。當下里見の有司港口の小吏
出迎へて其頭人等と士卒各二三十名を引て稲村の城に來にけり。其他は皆船に在り
せて乱雑を防ぐとのふ。犬塚信濃犬江親兵衛犬川荘次犬田豊後犬飼現八兵
衛等奉りて客の間にて酒飯の歓待あり。職政景澄及弘望等は其身并に絶内
外次の為に犬江が神薬の奇效にて死の刀瘡の愈るを歓びを演るとぞ。然べ憲房
朝良以下の敗將齊藤盛實に至るまで迎の士卒を待不娯て他等が饗饌果る
を聽て各急に別を告げて立去らまく欲せしかば義成則諸敗將に良馬各一疋を

牽出物として政木孝嗣満呂里時等に與へて是を港口まで送らしむ。惟稲戸津
衛由充のみ帰恨をいそがぬ先衆人を出し果て徐に辭し去まくする時義成主
犬川荘次犬田豊後をもて稲戸翁に這二大士に舊恩あり他等は既に
報恩の志を遂ぬ。汝は嘗べくもあらぬ。越後に塩に乏き地方と我
今より義任悔順に代りて年毎に行德塩一千苞を賜べし。必辭ぶべからずとあり。
由充は額に汗して開に思ひ切もあきいらで饒させるひねと惟辭ども。何ぞ听まん是
よりの後年毎に其餽送物のいとぞ怠而由充は妻有荻野井等を從へて犬川犬
田に送まで迎の船にうち乗りつ。夙く三浦へうち渡て。陸路を越後へ還りけり。只由
充のみならず。諸敗將の迎の船も皆三浦より出て來て。俱に三浦へ帰着せり。益安
房の洲崎より。相模なる三浦まで海上僅に六里なれば其近きに由まるべし。開が中に
成氏のみ。迎の伴當ヨヌらぬに憲房朝良の下風に立て。相模へ渡さんとの朽惜けれ

立も得去らで在り程義成又對面してみづから是を慰らる。其語次。御所成氏ハ春王安王君の令弟ゆゑをもて我大父里見季基と然ありし舊縁あるわゞ。是までの力戰ハ右ハ是左まれ既ふ恁親しく交り奉るべ舊交を結ばまく欲を。今ハ者も御領の郡縣ヨヌくらずを使ぬ上總うの御弓の莊を馬の飼料ふまゐらせ。とのハ是ゑ成氏慙愧ふ堪ず。推禁ゆゑ公合るやう。開ハ辱くハべども。我愚ふ一順逆の理ふ暗く惑ふゑ和殿を伐まくせ。後悔瞞を啜るのみふて其莊園を受んや。元ハ願ハくハ歸御の憶念爺の如し。此の伴當を貸るべ當國より上總を歷て陸路を許我へ還るべし。今の情願ハ是のごと又他事もなく請求れば義成ゆて異義ものく。尊ハ公其義ハいよ〳〵易く。御舊縁もハ大塚信濃成孝をゆゑ君を送らを奉りて今宵ハ猶又逗留ゆれ明日ゑ去るべりゆ是と留ひるを成氏ハ使も恍らぎ頭を掉りて最自由ふハべども。今より徑ふ去まく欲を。諸敗將ハ咸返さ是しふ我ゑ猶

淹留せば後の外聞も影護り。倘送りの士卒急の整へぎハ我伴當をのゑ者ていなんいるゝと性急る。需ふ義成禁難て去らば御意ふ任せんとそ退ぞて大塚信濃ふ事恁々と吩咐るべ成孝ゑ蝕くあらはそ其士卒を整ふ素より武備ゆる家風ふゆゑれば。一時ゑらぎ士卒の支度成りぬとふ成氏是ふ勢凭ゑそ成孝を労ひて迎ふ來る科草七郎望見一郎等を急しく里見の諸臣ふ別を正ゆ遽しく立出る程ふ大塚信濃成孝ハ行裝を整て望見一郎科草七郎等と俱ふ内玄関ふ俟て在り。許我の伴當五十名里見の士卒二百名義成主又命じて犬飼現八と田稅力助をゆ。其夜の歇舍まで送り行ちぬ。是等の伴當ゑ二三十名ゆるべ成氏既ふ立出る時義通君ハ杉倉直元等を從へて玄関まを是を送りぬ這逆旅の准備ハ成氏ハ轎子ふて成孝信道逸友ら各騎馬ゆゑ從ふ弓箭錄砲鎗棒柳箱を報る者數らぎ。恁てぞ稲村の

城の後門より。拾出して齊々と上總路を投て俱に行ける。然べ這急事ゆゑ。鄙の義成の云々とゆりける御弓の莊の事。成氏の辭ひし隨ゐて。其説〻〻を是よりの後里見義堯の時に至りて。許我より足利義明を招きて上總の御弓に在るゆゑ北條氏と力戰の後有ゐるゆゑ。時の人義明を御弓の御所とぞ稱ける。是其緣故なるべ。間話不題。却説成氏は自他の伴當に俱せて。ゆく行程は這日は三四里ゐるゆゑ。既に夕陽に及びて。大塚犬飼を相計て路傍なる寺院を宿とす。現八力助らは這里ゐゆゑ又成氏に謁して辭して去まくまる時。成氏是を労ゐて。義成の好意を謝らる。現八等は。其身の伴當を將て。逸時と共伴に路をいそぐ。其曉天に稲村へ歸りける。然べ又許我より來ぬる成氏を迎の船三四艘に頭人下河邊二郎行正間中大内藏直元と。士卒二百餘名うち乘りて。二十一日の下晡に洲崎の浦へ來着せり。這順風なりぐれべ遲參這時に及びてゐるんども。成氏。陸地を許我へくらんとゆゑ里見の士卒に送られて稲村の城を立去るひねと。受えてゐべ行正直元駭怕して。今ゐ城に赴奉るとも及ぶべからぬ。疾船を漕復して。待奉るゆゑ。則湊吏人に就て。來由を稲村の城へ告訴ゐる。次の日徐に追風を候ひて其船各帆を挽て。下總を投て走らせける。介程に成氏は大塚信濃に送られて。二三四日の旅宿をなる。安房より上總路を麻止て下總なる。真間の里に來ける時。既に申時に及びて驟雨連りに降沃げば。大塚信濃計ひて。成氏の轎子を國府臺の城へ舁入れさせて。則ち歌舍に。當城の番士の頭人真間井樅二郎秋季。継橋綿四郎喬梁等ハ豫て其のあるを得ゐるべ。敢慌てず。則振照弘教二潤鷲手士古内をして。是を迎させて。城の客の間に請待す。須々利檀五郎二四的奇舍五郎等も這城内に在り。俱に這応接に預りける。是より先に成氏を迎の頭人下河邊行正真中直元等は。其船昨朝暴河に泝り來て。國府臺の城下に歌りて在り。昨日使をして當城の番士等に成氏這

地を過らせるつゝ知せるつゝべしとのゝせーゝべ番士等則あくる汐て今這告あるかゝり行程直充い士卒五六十名をわそ船より出て城ゐ來り望見一郎科草七郎等ゐ對面て。本月二十一日ゐい逆風ゐそ船找まねゝ。憶ゐぎ遲参ゐ来るゝ且昨早ゐ墨河まで久う來て御歸路を俟奉うーそ。其顛末をゆえ上ーゝべ成氏ゆて其身ゐ性急ゆそ他等を俟ざうー衍まゝゝ敢其遲参を咎めゞ然い我い翌の朝開ゐ船ゐて許我還るべ。其准備をせよとゆくーゝべ行正直充ゐゝゐ船ゐる士卒ゐ下知を傳へて那身い臺の城内ゐ在り。船まで伴をせんとそ然い秋季喬泓等ゐ猛可ゐ二三百個の歌客ゐて。一愛時い混雑まぬまゞ。素より准備ゐ匿ーゝねゝ親疎の歌処を點配て上下の夕饌朝餉の儲疎ゐゝゞ既ゐ七日の暮ーゝべ成氏い浴ー夕饌果て。臥房ゐ隣まる編室ゐ在り望見一郎科草七郎の〻付ゝて最徒然ゐ見えーゝべ犬塚信濃成孝参ゝて。四表八表の話説ゐゞと是を慰めまゐるせけゝ。折ゐゝ驟雨の降〻降らぬ

窓を折り。夜風の音も平ゐゝぬ身い草枕旅ゐゐゝ。椎の葉ゐ裝る飯ゐゝそ。人の情の浅ゐゝぬ。浅ゐい思いね成氏も今昔のゐをひ出て。閑談ゐゝ蕭然之登時戊孝い謹で成氏ゐ稟もやう。曩ゐ御供ゐ入ま奉ーゝ。村雨丸の一刀いゝで君ゐ進らせ。愚父大塚番作の末期の遺訓を果さゞゆ。と思ひーのゝゆそ稲村ゆそい御同居の敗将達ゐ憚りあれゝ稟ー出る便宜もなく今宵涯りの御別まふゐりて心慌く。愚意の及ぶ所をゝそゝち驚ー奉る不敬を饒させ給へゝーゝ。刀櫃をゆをゝ曳よせ蓋を開きて合ゐ出も件の大刀を嚢の儘ゐ膝ゐ推立て。度ゐを徹て稟もやう。いでゝ者ゐた這御大刀い則君の御先考。持氏朝臣の御紀ゆそ春王安王君の御遺物ゐれゝいゝで君ゐ献せよと教えゝる亡父の志を今果ゝ臣等ゐ欽び何事ゝ是ゐ勝べ。遽莫先途の失ゐれゝ真の村雨丸欽ゐゝ。御面前ゐ試てん饒させゝとゆひつゝも開ゐ儘此退きて嚢の紋解き執出も件の

犬塚信乃
犬塚毛七郎
犬塚一郎

犬塚信乃
孝王孝を全ふして遺訓を果し

刀を引抜べ三尺の氷夏猶寒き稀世の名刀。燈燭忽地光を増て四下も赫奕可る。其柄を佶と握持て輪々丁とうち振る程ゐ怪むべし又尖ゑ。颯と漬る水氣ゐ露欽雷欽潑々と這席上ゐ降沃ぐを成氏主僕ハ憶ども。袖を急ゐうち拂へべ燈燭反て滅んとを折ゑ又簷上を過る驟雨の音凄〻く風さえ烈き雷霆の破々と鳴亘る。四月下旬の闇き夜ゐ窓の隙洩る電光走るや雲の行住ひそれとなく見えねども。彼と此とハ一時の感應又いふべくもあらざれば成氏憶ま聲を被てやよや信濃疑ひ解くゑ。先其刃を斂やまやと詞急迫しく制まべ戌孝ハ阿と応て准備の帛紗を懷より。拯り出しゑ濡ゑる刃を推拭ゑ鞘ゐ斂ゆ。膝を找ゆて左右のゐゐ棒げて辛ゑを呈まゑを成氏ハ左右ゑく受ぎやよや義士志ハ然ゑるれども。我一介の微恩もゑ忘ゐゐゐを其名刀を受んや。願ふハ和郎の家ゐ傳へて子孫の寶貨ゐせよゑ〻と辭ゐを戌孝ゆのへぎ。御諚でいへども。臣等ハ家ゐ傳へゑる。桐一文字の短刀ゆ〻近日又畢見

殿ゑ賜りゑる名刀もいへべ。自餘の刀劍ハ欲ゑるぎ。這村雨ハ御家の三里寶。他人の貨ゐ做ぎべゑるぎ。この故ゐ匠作番作父子二世の忠心を臣等ゐ迫りて果せゑ〻辭ゐを。ふとうふと。解れて成氏感謝ゐ堪ぎ。寔ゐ然〻我欲ぬゆゑ〻と。心ゑ大刀を受食。且べ主客の胸も上天も。齊け雷の音絶て。檐の溜水猶遺る殘滴のみぞ洩えける。當下成氏ハ感涙坐ゐ唱ひまぞゐ村雨の大刀を戮番欽ゑうち戴ゑ。傷ゐ閣て又成孝ゐ謝まるやゑ。信濃よ。和郎の至孝頗義を思へべいゑ〻恥〻我非德を爭何ハせん。今這奇貨を恵れゐ旅ゐ一わ且べ酬ん東西ゑ〻。其義を一筆示さんと。坐せ〻望見一郎ゐ逆旅硯を執出さて。墨を揖せて毫を染まべ。科草七郎あゑ。指燭を秉て照を程ゐ成氏ハ坐右ゑる。便面をうち啓きて。管を握りゑ苦吟ぎて。幾桁欽寫着しを。みづゑ讀見て含咲みゑ。拙けまども是を見よといひつゝ脊を伸し。開きて隨ゐ授る便面を。戌孝ハ遽しく膝を找ゑ受戴きて却燈燭の

下ゐ身をよせて晴を定めて是を見まゐ正ゐ是成氏の自詠の謌ゆえ。

まくらの許我の旅人ひら雨のしたゝり来てぬらす袖なる又其次ゐ心をありて。

そゝゐ右ゐ人のまゝとゝ雲ゐ〻ひとふりかたるむら雨の大刀と讀れゝば成孝屢ち嗟ゞ。深く感じて且のゐやう恐ゐ〻ら當意即妙是をゝ子孫ゐ傳へて家の宝ゐ仕らる。一唱三歎餘興自禁ぜぎのと無礼ゐいへども御返しを仕るべきもやとゝゝば成氏

ゝ且よりんゐんいゝゐぞやゝく。と問れて成孝何と答へて聲朗ゐ詠まゝゝく。

今ぞゐまと身のゐ是衣いひゝ雨ゐ親の送せ〻言の葉の露両三番吟ずる程ゐ成氏耳を敢て傾ゝ憶ず膝拍鳴して通愛ゐ実詠達意求ずしておのづゝ妙願ゐ是へ寫着てよゝ請ゝ刀の嚢を合ゝと裏をゝくして差寄ゝを成孝ゐ敢せず。其美ゐ許させゐひねと固辭ども何ぞ聽べゐ望見科草硯を舊ゐ卒と

ゝゐ促せば成孝竟ゐ脱ゐ路ゐ〻裏の黄光絹へ件の歌を書寫てまゐゝ

ゝ且ば成氏ゐ其黒ゐ乾くゝゐ寺て大刀を嚢ゐ斂る程ゐ短夜既ゐ深初て三更の鐘聲

ゐ〻ゐけゝ登時大塚成孝ゐ件の便面を推疊て懐ゐ楚と夾ゐゝ又成氏ゐ禀ゐゝ既ゐ

這年来の志ゐ仕りゐ人各其君の爲ゐ許我ゐ隣國へとゝゝ今ゝゝ後ゐ君の爲ゐ

寸忠ざゐ致まゝゝ願ゐ御身を愛〻ゐひね。夜も深ていへば枕ゐ就せゐへばやとゝゝば

成氏嗟嘆ていゝゝ所宜ゐ尓ゝ明日ゝゝ別ゐ分ゝ又望見一郎科草七

郎ゐ共侶ゐ成孝ゐ向ひて辭別の詞を盡しけゝ抑這壯佼ゐ曩ゐ犬江ゐ神藥

ゐて死を起されゝ恩義ゐ今ゐ犬塚ゐ忠孝の志を見ゐ〻ゝゝ敬服の思ひ

ゐゝ。悄地ゐ別を惜みけゝ。恁而次の日ゐ天好晴〻ゝ成氏ゐ辰牌時候ゐ國府臺ゐ

城を立出て墨河ゐ造りゝ船ゐ乗る程ゐ下河邊二郎真中大内藏望見科草

首ゐゝ許我ゐ伴當百十數名犬塚信濃ゐ士卒を將て其馬頭上まゝ送りけゝ。

休題再説往る二十一日ゐ政木大全満呂復五郎ゐ諸敗將ゐ還る船を洲崎ゐ

港口に送り果て犬川荘太犬田豊後等を俱して稲村の城に退る程に犬村大学堀内雑兵太郎田税戸賀九郎芦屋八郎等が一隊の士卒三百餘名を率て新井より

ひつ来なる船十艘許洲崎の港口に果てけり其後又妙真音立曳も単節に浦安牛助と援岡猿八等の士卒三十餘名同船して是も洲崎へひつ来り其詰朝大阪下野に士卒三四千名船七八十艘のうち乗りて小森但一郎木曽三太千代九圖書助小水門目鏡内葉四郎等と俱に五十子より帰帆のゆえあるよの日又大山道節帯刀登桐山八郎が二隊の士卒一萬餘名卯東小六荒川太郎一郎等と俱に一百餘箇の船に乗走らせて同港口に帰着せり皆稲村の城に参集ひしく屋の上に屋を重ねて人ヨヽくしと熟閑のよをうもあらぎ然べ犬江親兵衛に出て祖母妙真を港口に迎へ姥雪代四郎に十條力二尺八を携て出て音音曳も単節に夙く這童弟兄を見せまく欲を約莫這祖孫母子の功をもて恙なく再會に老を忘れ一鹿杖のつくる書

迭の長談に短き筆に細寫もぐくもあらぎ看官是を査まべ〜。恁而其次の日に犬坂犬村犬山等を目ひて武蔵相模に久しく在城せ諸頭人に皆義成主に見参して忠戰軍功を賞せらる。妙真音音曳も単節に別に又這事あり義成の夫人吾嬬前にも拜見して東西ヨヽく賜りけり。這餘の士卒も感恩命を稟ざる者なく都て休暇の命ありて各安堵の思ひを做をり是より又五七日を經て犬塚信濃に下總葛飾の墨河の邊に成氏主を送り果て士卒二百餘名を率て稲村の城へひつ来りけり。恁てぞ東西の擾乱餘波なく治りて房總平安なりけるべ良賤士民相賀して置酒して千歳を唱ざるべし。然程に瀧田の義實老侯に義成義通其身まで思ひ上げ昇進の事且八個の犬士まで受領の欽びに堪ぎ我老齢これ是なる朝恩武恩を稟奉りながら其両御使に對面せで居るべ〜這生緒を貪るべに

ゆゑぞとそ一日勅使代秋篠廣當と詣使熊谷直親を瀧田の城へ請待して

勸盃饗饌の歡待大くこゝらざるべ。八犬士も參仕へて。其席ゐを預りける。是のちのひろまさ。このちゝ。のうの後廣當直親い這地ゐ所要なけるとも東西の會盟を見果ぎ。て。きらく歸洛せんいさまをゞめそ。直親い水路より。鎌倉及五十子ゐ赴さそ。其義を專催促を廣當ゐ稻稻村の城内ゐ在り。這故ゐ東西の使者往來して會盟の日を定めらる。唐山戰國の時諸侯其國境ゐ出て。俱ゐ血を歃りて盟言を做せり。まうれども。武藏相模と安房上總い海を隔てれば會まゞ所ゐ。因て意ふゝ相模の三浦と安房の洲崎い海上僅ゐ六里ゐ過ぎ。ゐをりそ天よく晴うる日ゐ相臨めば浦の苫家も濱の雛松も瞭然として好見えざる者ゐ。然べ會盟の日ゐ定正顯定へ三浦の濱ゐ出べ。又義成い洲崎の浦ゐ出て。迥ゐ相臨む時東西の使者快船のうち乘うて且往來して盟言書獻酬の義を行ふ。則會盟紛れあるべゝを。とゐ熊谷直親豫う。秋篠廣當と商量して。相定る所。是うる東西其

准備わ。時ゐ六月朔ゐ。黴雨新ゐ霽て。薄暑炎熱を增折ゐ。ゐの日い黃道上吉ゐ。且海邊納涼の爲ゐ宜しけれ。そ豫て卜定せ。ま。けり。介程ゐ扇谷定正山内顯定い三浦の濱邊ゐ一座數間の假屋を架さ。そ。當日辰刻うる朝服ゐて出坐せう。這日來會の諸侯へ千葉ゐ自亂三浦陸奥守義同其子景春三郎義武上杉五郎憲房。扇谷五郎九朝良式部少輔朝寧。并ゐ大石石見守憲重其子源左衞門尉憲儀齊藤左兵衞佐高實。其子兵衞太郎盛實。長尾太郎爲景白石城ゐ重勝。巨田蒲新六郎助友。小幡木工大郎東震原播磨ゐ亂久。是之這餘足利左兵衞督成氏の名代下河邊莊司行包。長尾判官景春の名代直江莊司兼光來會。成氏い先度ゐ懲うる又景春い獨立の志あれ。各病着ゐ假托て。老黨をも名代。ま。の他ゐ服の大刀自い女流ゐ且ゐ會盟ゐ與らず。且越路い遠けれ。稻戶津衞由充ゐ辭して來會せざる。ま。の日諸家の從臣士卒ゐ。

て、枝舉ゆ遑めらず。假屋の三面ゆ紫の幔幕ゆ白く竹ゆ群雀の花號深做
うるを掛匝らして猩緋の氈をりて席其左右ゆ數鎗五十條と架豆一小幡
馬纏ゆ捍棒を執る走卒二百名。汀渚ゆ在りて敬儒を其小頭人各麻社衣を
卬く結ゑて十手を執る者四五名在り前濱ゆ准備の快船二艘を維ぎて其船毎ゆ
究竟る。舵工八九名ぞ待ちける。然べ又安房の洲崎の浦ゆ去歳の初冬造らせる
望海の臺あるべ別ゆ假家を儲るゆ及ぎ只中黒の花號ある幕を張豆一るのみ
ゆ。外物を飾るゆ一。恁而這朝里見左少將義成右衛門佐義通俱ゆ朝衣朝
冠ゆ。件の臺ゆ着坐在り両家老八犬士諸兵頭有司近習ゆ至るまぞ皆礼服の
袖を連ねて相從ふ者尠らず。其姓名ゆ省て具ゆせず。快船の准備ゆども自他異
なるべくもあらず。三浦の假家ゆ。諜使熊谷直親あり。洲崎の臺ゆ勅使代秋
篠廣當あり。俱ゆ這會盟を檢まるこけりまの日ゆ朝一り天一晴れべ這里ゆも

那里ゆも千里鏡を用ひぎて頭人寸馬瞭焉う。恁而己の左側ゆ三浦の濱
ゆぞ。暗號の烽火を颺一べ洲崎ゆぞも亦烽火をもと谷ともと登時三浦の方ゆり巨
田北新六郎助友麻の肩衣長袴ゆぞ。黄金莊装の大刀を跨らる項ゆ拠言書を藏め
る。細小樫を掛て船の中英ゆうち無れべ。從ふ士卒五六名。舵工八名艪ゆ八挺艪拍
子揃へて漕出ぎべ次ゆ快船又一艘小幡木工太郎東震ゆ這會盟の贄使ゆて其礼
服ゆ助友ゆ異らず。二樽三荷を相載て從ふ士卒八九名ゆ八挺艪ゆぞ漕せり。有
恁一程ゆ洲崎の浦より漕出ぎ二艘の快船あり其一船ゆ別人ゆ拠言書の正使
犬阪下野亂智ゆ次ゆる船ゆ贄使政木大全孝嗣無ゆり各礼服從者贄物
上ゆ寫ぎを相似られべ今ゆ名状まべらず。然べ東西四艘の快船ゆ波上三里の程ゆぞ。
端ゆくも遭際ゆ元自疾ゆ飛鳥ゆ異らねべ助友東震も亂智孝嗣も迭ゆ
目礼ぎぬるのみ一舞間ゆ行過けり。約莫船の迅速ゆるを唐山ゆて快船とゆ。

快く走まべるゝべ。國俗の所云鯨船又今俗の云推送り船の類ゆゑ今這四國の船の迅速なるを思ふべ。間話休題。小程ゐ巨田助友い其船又蚊く洲崎ゐ届りて。伴當を將て浦邊ゐ登まべ。嚴言固の走卒両三名案内して臺下ゐ造らるむ助友則袴の括緒を解捨て。拵言書を雙のゐ捧げて階を登まべ。大村大学立迎て引て義成主ゐ見あむ。助友先義成主を拜まれば義成急ゐ礼を返して其來意を問まくを當下助友い東西和睦會盟の一義を演て齎しる拵言書を呈閲を則是持資入道道灌が糟屋の舘ゐ在りて定正顕定の為ゐ綴る所ゝ義成是を大村大学ゐ讀まるゐ拵言ハ則五ヶ條ゆゑ善政を施して農を厲め天子將軍ゐ調貢を懈らずゆく。よく隣國ゐ入りて暴を禁ぜ境を犯さるゐ。賞罰を正くして賢を求め佞を遠ざけ。嫡子を廢て庶子を立るとゐられ妾を寵て妻ゐ傲きとゐられ凶年ゐハ隣國相資て其足らざるを補ひ。不忠不義の行ひ是ゆゑゐ其要領を載られば義成則姓名の下ゐ花押を寫して。指を刺て血を濺ぎ是を助友ゐ遞與て。且其使節を労ひて。大刀一口を授け。息助友謝して退ぞべ。小幡東震の船既ゐ造りて。贄物を進呈せり。里見の青侍等是を受合ひるゐ白酒一樽黒酒一樽塩鴈二折櫃生鯛二折櫃乾魚二折櫃是を東震則其目録を執りて階を登る時。大江親兵衛立迎て。義成主ゐ其義を生呈べ。東震ハ目録を呈閲して東西會盟の事果る。西堂領の欽びを傳達を義成是を謝して。又東震ゐ大刀一口を合せけり。抑巨田助友の心術人柄ハ人の知る所。這小幡東震ハ年尚小けれども。父東良の風ありて。忠義廉恥ゐ薄からねば。恁る時ゐも阿容ど後ゑぞ扇谷の内人ゐ只這俊傑二名ありて。先度の恥を雪めんとて。人皆是を咎めけり。然ば這時大阪亂智政木孝嗣が三浦の假家へ造りて。定正顕定ゐ會盟の拵言書を呈閲ゐるも贄物の二樽三荷を進呈せども。前ゐ寫れ趣と。然ばり差別るければ備ゐせぞ其拵言書ハ大村大学が

理義を詳かにして孝嗣と為す故に辞ふ

つ。これまごころ。これ又五个條ゆゑ自他示し合されども道理を知る者の藻まる文ハ。宛
綴る所と是も又五个條ゆゑ自他示し合されども道理を知る者の藻まる文ハ。宛
符節を合せる如く好相似るを人一奇とも定正是と白石重勝ゆ讀ませて顕定并ゆ
來會の諸侯と俱ゆ听けり。听果て又定正顕定より下。長尾景春の名代直江兼
充ゆ至るまで連歯姓名の下ゆ各花押を寫して又各各指を刺血を添けるを定正合て
亂智ゆ遮與まを受載きて得と見て。謝と懐ゆして罷出る時定正則大刀一口を牽
出物とも。次ゆ政木孝嗣入り登り來て又君命を演て贄物の目録を呈
まるべ定正蓋て合る所を知らど。顕定代りて謝して亦大刀一口を合ゆ出けり。這時
犬阪下野ハ既ゆ伴の士卒を招て船ゆ乗りて去りぬ。孝嗣も推續きて船ゆ乗ち
まく。まる程ゆ定正ハ大石憲儀をりて急ゆ是を赶ちめて且いハまるやう。前ゆハ
我徳て罪ゆき汝を死地ゆ置り其寃枉の分明るるハ往る日朝良朝翠が
稲村よりろへり來て詳ゆ告しべ只後悔の外ゆなど。汝倘三世の恩義を忘る

とゆく忠孝の心今も移らぬハ立ち入り來て我ゆ仕へよ。然ハ舊領ゆ十倍して与ヌ
美録を食せまく欲を。這義誰何と挑きけ。孝嗣是をうちゆて。詞徐ゆ答る
やう。御諚義りひぬ。臣等も又是人ゆ。其根を忘れて杪ゆ憑んや。ちろ是ども
臣ゆ君を棄てるゆあらど。君ゆ臣を殺せるゆ。夫覆水ハ盆ゆ復らぬ。出言ハ駟も
及ぶべからぬ。ちの折靈狐の冥助ゆくハ今ハくゆして。君ゆ見参せん。廷尉憲儀我
為ゆ謝せよ。君ゆ悪まを。ひとる。河鯉佐太郎ハ既ゆ死りぬ。今ハ義ゆ便り恩ゆ
縁る。里見の忠臣政木大全ゆ栄利の為ゆ共誘さて不義の奴ゆなるべくもいなど。
暇禀をと面も強袖を拂ゆ伴當をもゆ立て又快船ゆ乗てゆ洲崎へ
還りけり。憲儀ハ興醒て只得孝嗣の答へをもて返命をまをけるゆ定正听て眼を
瞬りロを鉗まる。鼻息のゆ又ゆよりもなりけり。然ハよの日東西の使者の快船水路
六里を往還たぬる程洲崎の臺ゆて當所洲崎明神の神人等。舞樂を奏を。

犬塚信濃犬山道節。俱に扇子を開きて立て舞ふに曲節に稱ひらべ人咸驚き見て。何ぞの日に学びしるやと。感ぜざる者なかりける。然ば又三浦の濱なる假家に。鎌倉より招きよせらる能樂人等。祝言の能樂を謠頌し其吹鼓の音迭に浦風に匂ひ。既にして助友東震に拒言書を捧て三浦に久し來り。又扇智孝嗣に連署の拒言書と定正顕定の謝書を受合りて洲崎の臺に幾日か來て。俱に反命を致す程に夕陽西に斜に登時義成義通八犬士を招て臺を下りて俱に波濤盡處に立程に定正顕定も來會の大小名を招て俱に濱邊に立出て東西一望時眺望て各揖讓して退散き是にて會盟果にけり。尓程に武藏相模安房上總の漁戸ども。其の次の日より。江海の境を論せず。自他ともに交りて網を下さに。俱に海幸ヨヌるりけるとぞいふ。生活の便着をはらり又武藏下總の境なる。両國河及墨田河に浮橋を架渡して良賤往還の便とまをせり。両國の士民相親しそ。胡越も所阻に做りにけり。按ずるに夫木集の康正の年間墨田河に浮橋加ふるを詠る歌に。

きみこ河むらしへ渡るぞ今をへ身をうれ橋の

わつ世なりけり。康正より文明まで遠からぬ。看官作者の用意を知るべし。本傳豊後の像賛に。墨田河まことにしたがひて渡りやまらぬ世をうれ橋へ昔なりけり。と詠りしへ右の歌を取るに畢竟扇谷山内の両管領里見氏と和睦會盟して。後の話説甚麼ぞや。開い又下回に鮮分るを聽ねかし。

作者云前に引る如く本輯百七十七回以下に前板發兌の時尚頒稿のまゝなりしを。看官に厚く結局までの趣を知せまほしくて其題目を增改へさもがほに。一回を上下に分ち或に三折して上中下の二巻に為るに是故に四十六の巻端に附録目を出して宜く是と併見るべし

南總里見八犬傳第九輯巻之四十九終

本傳刊行の書肆文溪堂賚言を。今板結局編算百七十七回以下の題目の前板に出さざりしよりて。文多くあるをもて。附録目數回を新に題して全部一百零六卷回外剞筆まで。一百九十一回にて。結局大團圓に成べきよう。作者の自注に見えたる如し。余るに這大部の書に總目録なくば。四方の君子。披閲の時毎に。搜索に便りなるべく。且遺忘に備るに足ざるべければ。今番又巻頭に乞ひて。首巻一巻を刊附せ。首巻に所云總序。全部總目録八犬士畧傳。姓氏目録等是也。這巻のうちに。則看官時に臨みて。某の事は某の巻某の回にありとのかたを。知るに速にして。利便是より捷へなし。況全傳中に善悪賢不肖の人物其姓名を漏さず。悉皆記臆せざるなし。余るを姓氏目録に据時は。搜索の暇を費さずして。當に掌を指が如くなるべし。言に半頁の餘紙あるをもて。賜顧億兆の君子に這故由を告奉るのみ。

大阪 河内屋喜兵衛
同 伊丹屋善兵衛
同 敦賀屋九兵衛
同 秋田屋太右エ門
同 河内屋茂兵衛
同 河内屋和助
同 秋田屋市兵衛
西京 出雲寺文次郎
同 村上勘兵衛
同 勝村治右衛門
同 杉本甚助

東京 須原屋茂兵衛
同 山城屋佐兵衛
同 小林新兵衛
同 丸屋善七
同 和泉屋市兵衛
同 須原屋伊八
同 出雲寺萬治郎
同 榛屋喜兵衛
同 近江屋半七
同 長門屋龜七
同 三家村佐平

名山閣 東京芝大神宮前書舗 和泉屋吉兵衛發售